

ホコガタフウロとタカオフウロについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI : On *Geranium hastatum* Nakai and *G. wilfordii* Maxim. var. *chinense* (Migo) Hara

ホコガタフウロ *Geranium hastatum* Nakai は日光の戦場原や丸沼の林下にのみ生育し、葉が3中裂して鋸形となり、他所に見られない特殊な植物である。中井猛之進氏(1909)はこれを新種として発表した。原 寛氏(1948)はミツバフウロ *G. wilfordii* Maxim. の葉形の異なる一型として扱うべきものとしている。しかし萼片に長毛があり、葉の毛はミツバフウロの2倍の長さがあり、大きな褐色の薄い無毛の托葉を持つなど、ミツバフウロとはかなり異なっていて、その変種とするのには問題がある。他に類縁が見つからないものである。しかし戦場原のような新しい場所には、近隣のものから分化した変異型は存在しても、独立種があるとは考えられないので疑問に思っていたが、それを解決してくれる種類が見つかった。それはコフウロ *G. tripartitum* Knuth の1型である。ミツバフウロがアジア温帯に広く分布するのに対し、コフウロは本州(東北地方南部以西)、四国、九州、と朝鮮の済州島に分布し、ほぼ日本の固有種と言ってもよい種類である。萼に長毛があること、葉の毛が長いこと、托葉が薄くほとんど無毛のこと、蒴果がミツバフウロほど長くなく、より細いことなど、葉が全裂する点が異なるが、それを除いて大体ホコガタフウロと共通である。最近 P. F. Yao (Edinb. J. Bot. 49 : 287, 1992) は Type を調べたところ *G. wilfordii* と異ならないとして、その異名に入れてしまったが、皮相的な見解である。

コフウロはいままで変種は記録されていないが、調べてみると2型が認められる。ひとつは茎が根際で数本に別れ、横に広がって先が斜上するもので、コフウロの基本的な形である。これでは葉が大体互生し、対生するものがあったとしても一方は他方より大きいことが多い。托葉はあまり目立たず長さ2-5 mm 幅0.3-2 mm である。もうひとつは根際からでた茎はしばらく分岐せずに直立し、2節目ほどで対生する葉ができ、そこから2又分岐した枝が上に伸びて互生の葉と花を付ける形である。

基準形のように茎が横に広がって斜上することはない。托葉は大きくて目立ち、長さ5-10 mm 幅0.5-1 mm である。これを便宜上タチコフウロと呼んでおく。どこにでも分布するものではないらしく、標本からでは、長野県南部(豊口山)、神奈川県(箱根、丹沢山)、群馬県(赤城山)、茨城県(筑波山)、栃木県(日光)などに見られる。しかし一定の分布域を持つものではなく、これらの地域には普通のコフウロも存在する。タチコフウロが特定の集団を作るというよりも、コフウロとの間に連絡がありそうである。葉が対生するものができても、この類はもともと仮軸分岐を基本とするので、条件に依ってはこのような型がでもおかしくない。生態的なものなのか、多年生なので初年度の個体がこのような型を取るのか今後の研究が必要である。このタチコフウロが葉形以外はホコガタフウロに良く似ている。茎は直立して、多くは途中に対生する葉があること、大きな托葉があることなど一致する。ただ前者は葉が基部まで3全裂する点異なる。タチコフウロの上部の葉は3裂して横に張り出し、全裂していてもかなりホコガタフウロに似てくるので、タチコフウロとホコガタフウロの間には関係があるものと考えられる。日光でも日光市に近い志津にはタチコフウロがある。ホコガタフウロは葉が全裂していなくてもコフウロの変種とすべきであろう。

ミツバフウロの萼は立毛が無いのが普通であるが、まれに立毛のあるものがあり、タカオフウロと呼び、中国中部、台湾に分布するミツバフウロの変種 *G. wilfordii* var. *chinense* (Migo) Hara の学名が当てられている(檜山, 本誌 38 : 60, 1963)。しかし、タカオフウロの萼の毛はやや長い毛が散生しているだけで、かなり長い毛が生える *G. chinense* Migo には該当しない。ミツバフウロには時に僅かだけでも立毛が出る個体もあり、井波一雄(広島県植物図選 3 : 52, 1985)が広島県からタカオフウロを報告しているように、ミツバフウロの中に時に見られる型である。タカオフ

ウロはミツバフウロから特に区別する必要は無いものと思う。

もうひとつの問題は *G. chinense* Migo がどのようなものなのかということである。御江氏がこれを新種として記載する際に10枚の標本が使用されているが、その内9枚が東大に保管されている。

この標本は1950年頃に未整理の標本の中から見いだされたもので、原寛氏が *G. chinense* を *G. wilfordii* の変種に組み変えたのはそれ以前なので、記載からのみで判断したものと思われる。御江氏の標本の中で、原氏の意味での *G. wilfordii* var. *chinense* に該当する標本は1枚しかない (Kiang-

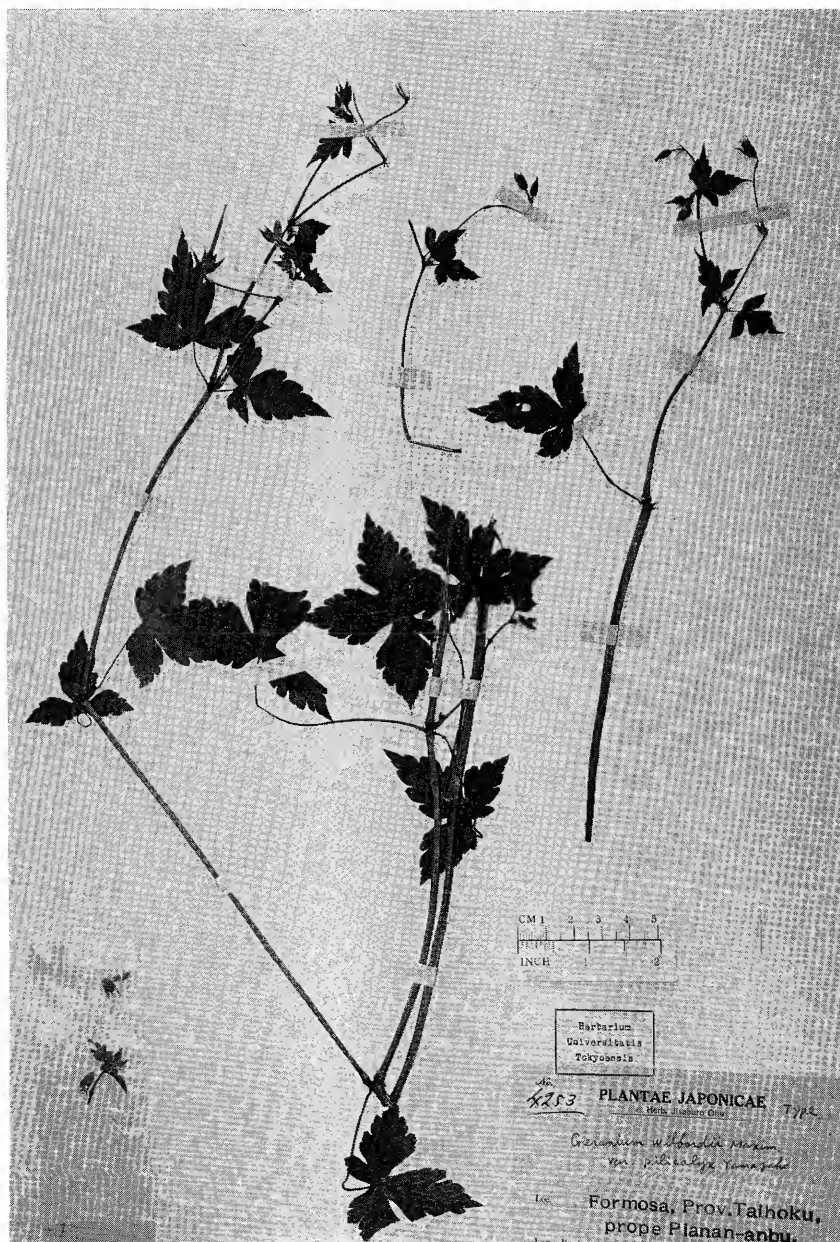


Fig. 1. *Geranium wilfordii* Maxim. var. *pilicalyx* Yamazaki. Type.

su, Shanghai, Hongjao Road, H. Migo, Jul. 19, 1931). それ以外の Holotype (Kiangsu, Sungkiang 松江, H. Migo, Oct. 17, 1933) を含む 8 枚はゲンノショウコ *G. nepalense* var. *thunbergii* である。したがって原氏の言う *G. wilfordii* の変種は記載されていない新変種になる。

Geranium tripartitum Knuth var. *hastatum* (Nakai) Yamazaki, comb. nov.

Geranium hastatum Nakai in Bot. Mag. Tokyo 23: 101 (1909).

Geranium wilfordii Maxim. var. *hastatum* (Nakai) Hara in J. Jap. Bot. 22: 172 (1948).

Distr. C. Honshu (Nikko).

Hab. Tochigi Pref: Nikko, Chuzenji (J. Matsu-mura, Sept. 27, 1879, Type TI); Yumoto, near Yudaki in shady forests, 1400 m (T. Yamazaki, Jul. 18, 1944, TI; K. Teramoto, Jul. 2, 1947; Ohashi & Murata, Jul. 12, 1977, TI). Gunma pref. Marunuma (H. Asuhyama, Jul. 25, 1930, TNS).

Geranium wilfordii Maxim. var. *pilicalyx* Yamazaki, var. nov. (Fig. 1).

Geranium chinense Migo in Journ. Shanghai Sci. Inst. Sect. III, 3: 95 (1935), pro minor parte, excl. holotypo.

Geranium wilfordii Maxim. var. *chinense* (Migo) Hara in Journ. Jap. Bot. 22: 172 (1948) nom. tant.

Calyx adpresse breviter pubescens, cum pillis longis patentibus obsitus.

Hab. Prov. Shantung: Taishan (Y. Yabe, Aug. 30, 1925). Prov. Kiangsu: Shanghai, Hongjao road (H. Migo, Jul. 19, 1931, TI). Taiwan: Prov. Taipei, Pianan (J. Ohwi, Jul. 22, 1933, Holotypus TI, Isotypus TNS).

Geranium nepalense Sweet var. *thunbergii* (Sieb. et Zucc.) Kudo, Medic. Pl. Hokkaido: t. 55 (1922)

Geranium chinense Migo in Jour. Shanghai Sci. Inst. Sect. III, 3: 95 (1935), pro major parte, cum typo, syn. nov.

Geranium wilfordii auct. non Maxim. : Icon. Corm. Sinic. 2: t. 2787, 1972; 江蘇植物誌 (Fl. Jiangxi) 2: 384, t. 1362 (1982).

Distr. Japan, Korea, Taiwan, C. to S. China and Vietnam.

Geranium wilfordii var. *pilicalyx* resembles *G. nepalense* var. *thunbergii*. They are distinguished as follows:

- A. Pedicels generally spreading-pilose; lobes of leaves subacute at apex, teeth obtuse to subacute at apex, leaves generally pentagonal
.....*G. nepalense* var. *thunbergii*
- A. Pedicels retrorse-pubescent; lobes of leaves acute to acuminate at apex, teeth acute at apex, lower leaves generally deltoid
.....*Geranium wilfordii* var. *pilicalyx*
(東京大学理学部附属植物園)

ヌルデの学名について (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI : On *Rhus javanica* L. and Its Variety

Rhus javanica L. は 2 枚の標本をもとにして記載されている。その一枚は *Brucea* 属のものであり、もう一枚は *Rhus* 属のものである。Britten (1910) はこの中の *Rhus* 属の標本を Type に選んでヌルデの学名を *Rhus javanica* L. とした。ところが Merrill (1928) は Britten とは無関係に *Brucea* 属のものを Type に選び *Brucea javanica*

(L.) Merrill の学名を作り、ヌルデには *Rhus chinensis* Miller の名を使用した。Merrill の処置は誤りで、ヌルデには *Rhus javanica* L. を使用すべきであることは、村田 源氏が詳しく述べている (植物分類, 地理 36: 173, 1985) ので、ここで繰り返す必要はないが、Merrill の影響は大きく、Flora Cambodge, Laos et Vitenam 2: 182, 1962;